総合周産期母子医療センター

１．スタッフ

センター長（教授）
中村（なかむら） 公俊（きみとし）
副センター長
（准教授） 大場（おおば） 隆（たかし）
（特任教授） 松本（まつもと） 志郎（しろう）
（講 師） 本原（もとはら） 剛志（たけし）
（助 教） 田仲（たなか） 健一（けんいち）
診療講師 齋藤（さいとう） 文誉（ふみたか）
特任助教 楢村（ならむら） 哲生（てつお）
医員ほか９名

２．センターの特徴、診療内容

周産母子センターは、新生児集中治療室（NICU）と母体・胎児集中治療室（MFICU）を備えており、母体・胎児管理と新生児管理との融合による「周産期」医療を目指して、各診療科の密接な連携を行い、母子ともに健やかに過ごせる未来のための医療を提供している。「周産期医療」「新生児医療」「生殖医療」の３つの専門領域を設置し、それぞれに副センター長が配置されている。西病棟８階の新生児部門にはNICU12床、GCU12床、西病棟７階には母体・胎児集中治療室（MFICU）６床が開設され、西病棟８階の小児科、東病棟８階の小児外科と共に小児周産期集学的治療フロアを作ることで連携強化を図っている。県内の総合周産期医療施設である熊本市民病院、および地域周産期母子医療センターである熊本赤十字病院、福田病院と連携を密にとりながら、熊本県全体の周産期医療の円滑な診療に貢献できるよう努めている。

３．診療体制

日本小児科学会専門医 12 名、日本産科婦人科学会専門医５名、日本人類遺伝学会臨床遺伝専門医２名
日本周産期新生児学会専門医３名、日本超音波医学会専門医２名

〇外来診療体制

小児科外来として月・水・金に NICU 退院後のフォローアップ外来を行っている。産科外来は月・水・木（再診のみ）・金で、更に助産師外来、母乳外来で、妊産婦へのきめ細かい医療を提供している。

火曜日に遺伝カウンセリング外来(予約制)を開設しているほか、平成 25 年 12 月より無侵襲的出生前遺伝学的検査（NIPT）への対応を開始した。

NICU/GCU には平成 30 年より保育士も診療に加わった。現在３名の保育士が新生児のケアを看護師と協力して行うことで、きめ細やかな家族に寄り添った医療を提供できるよう努めている。

〇病棟診療体制

月：産科婦人科近藤英治教授回診
　　小児外科日比泰造教授回診
水：小児科中村教授回診/小児科カンファレンス
　　周産期合同カンファレンス（産科、小児科、麻酔科）
木：ドクターナースカンファレンス
金：移植前カンファレンス

４．診療実績（令和６年度）

〇疾患別の患者数

＊新生児：総入院数 191 名、
超低出生体重児 16 名　極低出生体重児 34 名
低出生体重児 96 名　小児外科症例 18 名、
低体温療法３例、一酸化窒素吸入療法４例
気管内挿管による人工呼吸管理 134 例
新生児救急車出動回数 17 件
＊母体：総入院数 567 名、分娩数 323 名
早産 57 名　妊娠高血圧症候群 53 名
前置胎盤 28 名　常位胎盤早期剥離４名
胎児発育不全 20 名　多胎妊娠 12 名
母体救急搬送 100 例

〇主要な疾患の治療実績

母体：帝王切開率 53.6％

〇外科症例

先天性食道閉鎖、小腸閉鎖、横隔膜ヘルニア、鎖肛、腸回転異常等、出生後早期に手術が必要となる疾患について小児外科と共に診療している。

〇緊急帝王切開症例、低体温療法症例

NICU では重症新生児仮死で神経予後改善のため低体温療法を要する児、MFICU では出生後に仮死になるリスクのある常位胎盤早期剥離など緊急性の高い母体症例を積極的に受け入れている。

５．地域医療への貢献

熊本新生児合同カンファレンス、熊本周産期懇話会の開催。県の防災ヘリを利用した母体、新生児搬送受け入れを行っている。また新生児救急車の運用を継続し、昨年は 17 件行った。

６．医療人教育の取組

学生教育として臨床実習、卒後教育として初期研修、後期研修のプログラムの一環として研修医の受け入れと指導を行っている。日本周産期・新生児医学会の周産期専門医基幹施設、新生児専門医指定施設として専門医を養成、新生児蘇生講習会Ａコースを年２回、Ｓコースを年４回行っている。

ＮＩＣＵ

ＧＣＵ

家族室・授乳室

小児科病棟へとつながる廊下

ＭＦＩＣＵ

新生児救急車